

レバノン東部にできた非公式のシリア難民キャンプ仮設。地主が土地を提供し、国連ではなく地元有志の管理になっている



アハメッド・Sさん

# ダマスカスから スウェーデンへ ——あるシリア人の体験

パレスチナ子どものキャンペーンは、2012年秋からシリア難民の支援を継続しています。最初の年はヨルダンで活動をしていましたが、その時の現地スタッフの一人にアハメッドさんというシリア人がいました。その後事業地がレバノンに移ったため、アハメッドさんはエジプトに行ったのですが、しばらく音信が絶えていました。最近になって、彼からスウェーデンにいるという知らせが来ました。彼も多くのシリア難民、パレスチナ難民と同じように命がけて地中海を舟で渡ったのです。その体験を書いてもらいました。

私の生まれた町は、ダマスカス中心地からバスで25分ほど離れています。革命が起こる以前は、仕事、通学、友達に会うなど毎日ダマスカスに通ったものでした。バスが24時間走っていました。

**2011年**に革命が始まった時、こんなに長引き、こんなに恐ろしい戦争、破壊、無秩序になるなんて予想していたシリア人はいませんでした。しかし、政府軍がいたる所に検問所を設置し始め、25分で行けたダマスカスに到着するのに2時間もかかるようになり、無差別発砲や無差別逮捕のために危険が増大していったのです。ダマスカスで爆弾事件も起こりました。その時、ヨルダンにいる日本人の友人Iさんが、事態が落ち着くまで自分の家に來たらと招待してくれたのです。

**2012年5月**、夏服しか入っていない小さなかばんを持って私はアンマンに出発しました。それが故郷を出た最後でした。事態はさらに悪化し、2012年8月に、政府軍は戦車と飛行機で私の町を爆撃し始めました。そして家族からは、決してシリアに戻ってこないようにと言われました。

Iさんは日本人をたくさん紹介してくれて、新しい友人ができました。しかしIさんが帰国した後、心理的にも経済的にも最初の辛い日々が始まりました。数カ月間は友人の家を転々とし、ヨルダン政府がシリア人の就労に厳しい制限をかけたため、生活が困難になりました。時折アルバイトをしました。南米テレビ局と共にザアタリ難民キャンプに行ったとき、偶然にもかつての知り合いの日本人Tさんに会いました。彼

は、私が以前シリアのUNHCRのイラク難民支援で働いた経験があり日本語ができることを知っていたので、当時ヨルダンでシリア難民の支援を始めたパレスチナ子どものキャンペーン(以下CCP)に紹介してくれました。それが私のCCPとの最初の出会いでした。まずはアルバイトから始まり、**2012年11月から**6か月間現地職員として働き始めました。同僚のYさんは弟のようでした。上司のMさんは兄になりました。CCPのおかげで経済的自立ができ、そして同胞を支援するという機会に恵まれました。

CCPのヨルダンでの支援活動は4月末で終了したので、ヨルダンを離れてエジプトに行くことにしました。当時エジプトではムルシー大統領がシリア人を歓迎していたからです。さらにエジプトなら生活費が安く、チャンスがあると思ったからです。CCPの仕事で蓄えも少しでき、勉強をして奨学金に応募しようと考えました。

**2013年5月**私はエジプトに行きました。母と妹をエジプトに呼び寄せ、カイロのアパートで何人かの親戚と一緒に滞在しました。ところが親戚と友人が大挙して押し寄せ、睡眠をとるスペースさえなくなってしまいました。しかもその直後、エジプトで軍事クーデターが起き治安情勢が後退しました。もはや何もできなくなりました。エジプト新政権は、シリア人が問題を引き起こす原因であると非難し、多くの人びとが私たちを犯罪者とみなし始めたのです。新たな規制のもとでは、他のシリア人と同様に私も違法滞在の状態

になっていました。私たちはエジプトの政治ゲームに利用されたのです。生活はさらに困難を極め引きこもる生活が始まりました。そして、希望がついた私は、ついに「死の舟」に乗ることを決意したのです。所持金が底をついた後に残された最後の希望でした。旅に向けて3500ドルを借りることができました。

**2014年5月**三人の友人とアレキサンドリアに行き、2500ドルでヨーロッパに渡るという取引をしました。日本人を含む友人たちが私を引き止めるためにわざわざアレキサンドリアまで来てくれましたが、私の決意はとて固かったのです。友人たちは、私たちに救命胴衣といくらかお小遣いをくれました。密航業者は私たちを12日間引き留め、私たちは彼が嘘をついていることを見破りました。私たちはそこを逃げ出して、別の業者のもとへ行きました。翌日、すぐ出発だと言われました。私たちはビニールで覆われたトラックに乗り、何時間も揺られました。

夜12時頃、砂漠のどこかで私たちは投げ出されました。月明かりの中、完全武装した覆面のベドヴィンがいっぱい見えます。ベドヴィンは真夜中に叫び始め、本当に恐ろしかった。1時間ほど歩き続けると、ようやく砂の湿り気を感じ、海の音が聞こえ、小舟が見えてきました。と突然、無差別の発砲が始まり、完全な混乱状態に陥りました。みな走り出し、弾丸が自分のそばを突き切った音が聞こえました。邪魔になった鞆は放り出しました。友人の一人が転倒し「死にたくない！ 死にたくない！ 生き延びろ！」と叫びました。恐怖しかありませんでした。走り続け、はって進み灌木を見つけました。二人の友と私は灌木と砂地に身を隠しました。射撃の音が聞こえ続け、車が通り過ぎました。恐怖でいっぱいでした。人の叫び声が聞こえました。日の出まで動かないことに決めました。転倒した友は死んでしまった。彼の家族に何と言ったらよいのだろうか。それからの数時間は永遠に続くかのようでした。

太陽が昇り始めたので友人を探そうと携帯の電源を入れると、着信がありました。彼は軍隊に捕えられ、私たちは軍用地内にいるということです。ショックでした。地雷が埋まっているかもしれないので、街道まで注意深く歩き、日雇い労働者たちの車に乗せてもらって街に戻り、アレキサンドリア行きのタクシーに乗りました。

カイロに戻った時にはとても汚れて濡れていました。二度と舟には乗らないと決めていました。しかし数日後、友人と私は希望が全くなく、あらゆるものが

暗闇のようだと言われ始めたのです。どうするか？ 自殺するのか、エジプトの生活を受け入れるのか、また試練に臨むのか。非常に悩みましたが、二度目の試練に臨むことを決めたのです。

二度目は**2014年6月**でした。私たちは、エジプトの総選挙結果が発表される日に決行しました。再びアレキサンドリアに行きました。数日そこに滞在した後、夜11時頃、業者は私たちをバスに乗せ今晚出発すると告げたのです。私たちはアレキサンドリアの沿岸リゾートに連れて行かれました。5分も歩いたところで突然小舟が現れました。体の半分が水に浸かりながら海を進みその小さな船に飛び込みました。漁船が小舟を沖合までロープで速く引っ張り始めた時、業者は私たちを脅かし始めました。持ち物を盗りたかったのです。携帯電話とお金を盗られた人がいました。

遠く消えていく町の明かりが見えました。静寂な瞬間でした。私がエジプトを見たのはそれが最後でした。1時間以上経ち、私たちには漁船の小さなエンジンの他には何もなく、揺れ動く波と暗闇だけがありました。恐怖で自制心を失った人、嘔吐する人もたくさんいました。今度は、大きい漁船に乗り移りました。小さな船から大きい船に移る時、私は誰かにしがみつかれ、海に落とされそうになりましたが、相手を舟に押し戻し、なんとかバランスを取ることができました。二人とも溺死していたかもしれません。私は水のボトルとデーツの箱を持ちこめました。船の底は酸素がなく、ふだんは魚の保管場所に使用されているのでとても臭く、多くの人が嘔吐し意識を失い、泣き始める人もいました。

数時間後、私たちはエジプトから完全に離れ、地中海のどこかにいました。最初の数日は食べることができず、あまりに不潔なトイレに行くことができない人がほとんどでした。食べないと生き残れない。私はどんな食事でも欠かさず、業者にも賞賛されました。数日後、多くの人々が意識を取り戻し始めました。他のグループがこの航海に加わるまで数日待機させられた後、遂にリビアに向かい始めたのです。

リビアからやってくる別の小舟に乗り移るのだと言われていましたが、8日目にリビアで大事件が起きたため舟が来ませんでした。私たちは知りませんでした。業者は私たちをエジプトに送り返そうか、海に投げ捨てようか考えていたのです。一部の人は、暴動を起こし船長と乗組員を人質にとろうと準備を始め、

自分たちで船を航行しようとしてしました。しかし乗組員は武装していたのでそれは実に危険なことであると私は思い、暴動を起こさないように説得しました。乗組員も混乱し、何をすべきか分かっていなかったので、待つほうが良かったからです。

水と食料が無くなりました。最後の数日、私たちは乾燥した不潔なパンと、ほんのちょっとの豆のスープしか食べられませんでした。乾燥したパンからゴキブリが出てくるのを見たものの選択の余地はなく、ゴキブリにも生きる価値があると感じました。健康のために日の光を浴びました。そうでないと船酔いするからです。しかしひとたび屋根のある場所を離れると、屋根なしの部分で眠らねばならず、夜は大変冷えます。眠れない夜が何日も続き、友人と抱きあいながら眠りました。

13日目には、エジプト人の未成年者が大勢乗った木造船に移動させられました。非常にひどかったのですが、そこに移動したくはありませんでしたが、選択肢はありません。その舟はすでに150人でいっぱいでしたが、私たちをいれて300人になりました。屋根の上に乗せられ、二日と一晚をそこで過ごしたのです。トイレに行くことも、食べることもできませんでしたが、持っていた水のボトルとデザートのおかげで辛うじて助かりました。私は2日間トイレにも行けませんでした。昼間はひたすら暑く、夜はひたすら寒かったのです。

舟は夜ものすごく揺れました。私たちは眠ろうとして目を閉じ続ける努力しました。人は悪夢から覚めると安心するものですが、ここでは完全に逆のことが起こりました。目を覚ますと現実が悪夢でした。隣人と抱き合いながらまた眠ろうとしました。夢の中では立ち上がることができませんでした。もし立ち上がったら、海に落ちてしまうのです。寒くて風が強くと舟はかなり揺れて、揺れる星や暗闇を見ました。私は眠ることができただけ幸運でした。

翌日、私たちは飛行機を見つけ手を振って合図しました。イタリア沿岸警備隊の船がその日の終わり頃やってきたのです。島のように巨大なタンカーに私たちは移送され始めました。大勢だったので何往復もしました。私はほぼ最後の一人で、日没のちょうど前に連れて行かれました。私が舟から離れたすぐ後、舟は海に消えていき、私の人生の一つの章が終わりました。生き返ったと感じました。ビスケットと缶詰の水を与えられ、船も安定していました。シチリア南部で赤十字に引き渡されるまでの2日間をそこで過ごしました。

私は、輸送船で食糧配給を手伝い始めました。英語を話せる人が二人しかおらず、私はその一人でした。

イタリアは驚くほど美しく見えました。私たちはパレルモの難民キャンプの一つに送られました。海上で17日以上過ごした後の初シャワー。真っ黒な水が何分間も流れ出ました。信じられませんでした。私はひげをそり落とし、新しい服を着ました。古い服はとても汚かったので捨てました。まるでぼろ布でした。古い服を捨てたため、パスポート以外に過去と私をつなぐものは何もなくなりました。

イタリアは難民への規制が非常に厳しいため、難民キャンプから逃げようと思いました。移民局が来る前に、私たちはキャンプから逃げ出しローマに行きました。そこで天使に会いました。ノルウェーの友人がある女性にお金を託して私のもとに届けてくれたのです。そのお金があったので、遠縁の親戚を頼ってフランスのグルノーブルに行くことができました。そこに約一週間滞在し弱った体も回復し始めました。旅行者を装うため服を買いリヨンに行きました。リヨンでは友人に会いました。9年前、フランスに留学する彼を私が援助したのです。その人は、私たちのために食糧とパリ行きチケットを買い、私にお金をくれました。私は泣きました。過去の良い行いで、どん底の自分が報われるなんて予想もしていなかったのです。近くに警察がいらないか、取締りがいないかも確認してくれました。

それからパリに向かい友人と私はパリで一晩泊りました。遠くからエッフェル塔の一部が見えました。エッフェル塔を訪れることは夢でしたが、用心して次の機会にしました。私たちは移民たちと一緒になるのを避け、カフェに座っていても誰も疑いませんでした。できるだけ夜行列車に乗りました。ホテル代を払う必要が無く列車の中で眠れるからです。翌日、ドイツのケルンで有名な大聖堂を見ました。とてもきれいでした。列車はハンブルグ、コペンハーゲンを通り、遂にスウェーデンのマルメに到着しました。その後5ヶ月間難民キャンプと移民局の宿舎に滞在しました。

**2014年7月**人生の新たな章が始まったのです。

現在も私はマルメに住み、日本人の友人もいてとても幸せです。またスウェーデン人の友人たちからも信頼されていると感じます。私は、今までの友人や経験に誇りを持っています。いまスウェーデンで生活しながら、日本の心を持ったシリア人、そして誰もが同胞であるとする世界市民だと感じています。